山のおじゃまむし

2019年度号

一般財団法人 自然学総合研究所　野平 照雄

はじめに

昆虫類の中には害虫と呼ばれ、目の敵にされているものがいます。農業、林業、果樹や花卉などに被害を及ぼす害虫や私たちに激痛、湿疹、痒みなどを与える毒虫などです。このほか、姿だけで得体の知れない虫、気味が悪いといって嫌われている不快害虫？もいます。その数は無数です。

しかし、これらの害虫も地球に棲む生物の一員。厳しい自然界を生きています。その生き様は実に巧妙です。驚きます。その知恵には感心してしまいます。

このシリーズは私が目にしたこれら害虫の生活やその時の出来事、感じたことをエッセイにしたものです。学術書ではないので軽い気持ちで読めると思います。暇なときや気分転換を図るときに御笑読いただければ幸いです。

なお、タイトルは「**山のおじゃまむし**」となっていますが、山にはたくさん害虫がいるからという単純な発想からです。このため、山だけでなく田、畑、果樹の害虫から一般昆虫、さらに昆虫でない動物も登場します。

一般財団法人自然学総合研究所　理事　野平 照雄

山のおじゃまむし（７２）
２００万円、ヒラタキクイムシ

とっておきの虫を出すことにしよう。その虫の名はヒラタキクイムシである。ご承知のとおりヒラタキクイムシはマイホームの大敵として有名である。しかし、私にはこの虫が害虫であったからこそ、研究生活ができたのではないかと思っている。この虫には嬉しかったこと、楽しかったこと、そして悲しかったことなどの思い出がたくさんある。今、その光景が脳裏を去来する。

×　　×　　×　　×

私はヒラタキクイムシについて勉強するため、国立林業試験場のＮ博士のところへ研修にいった。博士はキクイムシの分類では世界的な権威者なので、私はこの機会に昆虫の同定の基礎を教えてもらおうと思っていた。しかし、博士は大変気難しい人で、同定の極意は教えてもらえないだろうというのがおおかたの意見であった。確かに博士はとっつきにくかった。積極的に話しかけられることもなかった。「さて、どうすればよいか」と思案した。そのうちに博士は無類の酒好きであることを知った。「そうだ、酒の力だ」と思った。しかし、こちらから誘うわけにはいかない。やきもきしているとき、逆に博士から声がかかった。この日から、昼は先生と生徒、夜は飲み友達の関係になり、飲み屋通いが始まった。何回か飲んでいるうちに博士に気に入られ、念願だったキクイムシの同定のコツを教えてもらうことができた。まさに酒の効用であった。これは大変勉強になったし、私自身すごく伸びたと思っている。これもヒラタキクイムシがいたからで、害虫どころか私にとっては非常に有益な虫であった。　　×　　×

研修中に博士は、「ヒラタキクイムシ試験のポイントは大量増殖技術の開発だ」と何回も言われた。早速、私はこれに取り組んだ。詳しいことは省略するが、あることがヒントとなってコナラの若木を低温乾燥して試験材を作り、これで大量増殖技術に成功した。しかし、これには博士の助言と多くの人に手助けしていただいたからである。中でも岐阜県林業短大のＭ君にはこの試験の良し悪しを決定するともいえる試験材作りをほとんどやってもらった。ありがたかった。そのお礼を兼ねてＭ君を我が家へ招待し、お酒を飲みながら食事をした。その時、彼は自分の夢を熱く語ってくれた。私は自分の信念をもったすばらしい学生だと思った。

×　　×　　×　　×

この飼育技術の開発は高い評価を受けた。しかも、上司がこの技術を林業技術賞に推薦したところ、運よく受賞することができた。私は間違いではないかと思った。しかも副賞として１０万円もらい、大変気分をよくした。それどころか祝賀会まで開いてもらい、酒をたらふく飲んで桃源郷にいるような気分になってしまった。さらにこの運が私を後押しした。岐阜県知事賞までいただいたのである。このときの副賞は特別昇給であった。手にしたのは紙切れ一枚であったが、担当者の話では積もり積もって最終的には２００万円くらいになるのではないかとのことであった。私はこの小さな虫のお陰で一度に名誉と富を手にしてしまった。私は運がよかった。

一般財団法人 自然学総合研究所

山のおじゃまむし（７３）
観察するのが仕事、ギフチョウ

私の第二の勤め人人生が始まった。動植物など自然を相手に調査、研究をするところだ。私の担当は昆虫類。好きな昆虫相手に野山を駆け巡れるかと思うと胸がわくわくする。初出勤した日にミーティングがあった。ここで出てくる言葉は、ギフチョウ、ゲンジボタル、オオタカ、イヌワシ、ホトケドジョウ、ハリヨ、コウホネ、貴重種、環境、保全などといったものだ。今までは、スギ、ヒノキ、松くい虫、植林、林業機械、シイタケ、予算、研究課題、研究成果などであったから、共通する単語はほとんどない。そのためかずいぶん気が楽になった。と言うのは、今までこれらの単語と書類作りがセットとなっていたからである。ミーティングでは今後のスケジュールについて説明があった。土日や休日の調査や夜間に行う調査などがたくさん予定されていた。でも、やりがいのある仕事なので楽しみであった。

×　　×　　×　　×

入所３日目。勉強会があった。テーマはＴ村のギフチョウ発生状況。Ｔ村では自然研の指導でギフチョウの保護増殖に取り組んでいるので、今年の発生状況を確かめようと言うわけだ。所長以下６人の全研究員が参加した。ちょうどギフチョウの発生最盛期で舞い舞っている光景を見て、胸が躍った。特にカタクリの花で無心に吸蜜しているギフチョウに心を打たれ、思わずカメラを取り出しシャッターを押した。ギフチョウを監視している人がきた。「今年もたくさんのギフチョウが発生しました。先生方のお陰です」と頭を下げられた。この方はボランティアで村内をまわっているという。こうゆう方のおかげでＫ村のギフチョウが守られているのだと思った。この方は監視しながらギフチョウを撮ってみえた。どれもすばらしい写真であった。「ギフチョウは追いかけて撮るのではなく、待ち構えていてシャッターを押すのですよ」と言われた。それにしても、仕事でギフチョウが観察できるなんて夢ではないかと思った。

×　　×　　×　　×

その翌日。今度はＫさんとＥ方面へギフチョウ調査に出かけた。ここは整備した溜池近くにギフチョウが生息しているので､これを保護しようと地域住民と取り組んでいる事業地である。しかし、環境が悪い。本当にいるのだろうかと思った。Ｋさんは青いジャンバーを着ていた。こんな暑い日にジャンバーとはと、私には異様に映った。しかし、訳があった。Ｋさんが言うには、ギフチョウは青いものに集まるのであえて着たという。「本当だろうか」と私には信じられなかった。ところが、そうではなかった。やはりギフチョウがきたのである。しかも青いジャンバーにまとわりついている感じなのである。ギフチョウにこんな習性があったのか。まだまだ勉強不足だと思った。

×　　×　　×　　×

さらに二日後、やはりギフチョウ調査でＫ村へ出かけた。Ｋ村ではなぜかギフチョウが見つかっていない。しかし、食草であるヒメカンアオイが自生しているので生息している可能性が高い。「少し時期がはやいようだ。１週間後に出直そう」とＫさん。はたして次回みつかるだろうか。今から楽しみである。入所して１週間はギフチョウで明け暮れた感じだ。ここ数年は野外での調査をほとんど行っていなかったので、このストレスが一気にふっとんでいってしまった。気分は実に爽快である。さあー、明日もギフチョウ探しだ。

山のおじゃまむし（７４）
スリが群がる、イタリアのアリ

イタリア旅行の話をしよう。今回が最終回。イタリアはスリが多いから気をつけること。これは本にも書いてあったし、行く先々で現地のガイドから口やかましく言われたから本当なのだろう。しかし、私には信じられなかった。先進国イタリアにスリなどいるはずがないと思ったからである。皆が用心したせいか、誰もスリの被害を受けることなく最終地のローマへ着いた。ローマは古代都市の雰囲気が漂うすばらしい街である。あちこちに史跡があり人が多い。ここでもガイドが言う。「スリに御用心」。しかし、周りを見てもそれらしき者はいない。「本当にスリがいるのだろうか」と、また思ってしまった。

×　　×　　×　　×

有名なトレビの泉へきた。人が多い。歩くに歩けないのである。まるで巣に群がっているアリのようであった。そこへ大きなオートバイが２台きた。するとあっという間に人が減り、自由に歩けるようになった。すぐにガイドが説明した。「今、急にいなくなったのがスリです。警官がきたから逃げていったのです」。さらにガイドは「今のスリは観光客のふりをしてグループで行動しているのです」と言われた。私は唖然とした。「あれではわからなですね」とＴさんに言った。するとＴさんは「私たちのほうがスリに似ているのでは」と苦笑された。スリが去った後のトレビの泉にはまた人が集まってきた。「またスリがきたのだろうか」と思ったものの、私には観光客にしか見えなかった。私はアリの巣を突っついたあとに再びアリが巣に群がる光景に似ていると思った。

×　　×　　×　　×

ローマで印象的だったのはバチカン美術館であった。すごい数の絵画や彫刻。何万点あるのだろう。その規模に圧倒されてしまった。人気があったのはやはりミケランジェロの「最後の審判」であった。この部屋は、人、人、人で身動きできないくらいであった。この絵の大きさと力強い描画に圧倒されてしまった。ここで京都から来た人と知り合った。その人は「仲間がスリにやられたの。気をつけてね」と言われた。ここにもスリが来ているのか。スリの執念のようなものを感じた。美術館を出たら並木があった。日本のプラタナスに似ている木だ。私は日本にいるようなつもりでその木の樹皮を剥いだ。樹皮の下に虫が隠れているので、それを採ろうと思ったからである。何本かの樹皮を剥いだが、いるのはアリばかりであった。ここでもアリかとなぜかスリのことが頭をかすめた。×　　×　　×　　×

ローマ市内はＴさん家族と見学した。まあ、言ってみれば田舎者が異国の地へ放り出されたようなものだ。まず、言葉が通じない。これにはまいった。それでも身振り手振りで聞いたりして市内の史跡を見学した。予定の所へなかなかたどり着くことが出来なかった。でも楽しかった。これが本当の旅行かと思った。疲れてきたので、途中からタクシーで移動した。ところが、同じところへ行ったのにＴさんは私たちより倍近くの料金をとられたのである。私はＴさんに「田舎者にみられたのですよ」。Ｔさんは「次は野平さんですよ」。帰る時間となったので、タクシーでホテルへ向かった。しかし、なかなかつかない。運転手が遠回りしたのである。私は「やられた」と思った。と同時にイタリアのイメージを悪くした。でもよい人たちと楽しい旅行ができたので、本当に楽しい旅行であった。こんな思いをいだいて帰りの飛行機に搭乗した。

山のおじゃまむし（７５）
帯状疱疹、ゲンジボタル

ホタルの研究は重要テーマのひとつである。研究内容はホタルの生態調査等から保護、増殖等幅広い分野に及び、やりがいのある研究である。これはこの地域で大規模な耕地整理が行われることになり、これによってゲンジホタルのいる小川が埋没してしまうので、近くに代わりの水路を造ろうというのである。新しい水路は指導しながら地域住民がボランティアで造成し、前年に完成していた。だから、私はこの経緯は聞いただけで、直接指導していない。だけど、この人口水路からホタルが発生し乱舞する光景が見られるか楽しみであった。

×　　×　　×　　×

このホタル水路は石を並べて造成し、その周囲にはこの地域の植物が植えられていた。もちろん水路の中には葦などいわゆる水生植物と呼ばれる植物も植えられている。これらの作業はこの地域の住民がボランティアで行ったと言う。そして、地域住民にはただ労力を強いるのではなく、ホタルとはどうゆう昆虫なのかを理解してもらうため勉強会を何回も開いたというからすごい。「なるほど地域でホタルを保護するわけか。いいことだなー」と思った。この水路の周辺にはどのような昆虫がいるかを把握しておくことも重要である。環境がよければたくさんの昆虫がいるし、悪ければその逆である。昆虫調査を行った。私の最も得意とするところだ。いろいろな昆虫がいた。「よい環境だ」と思った。そしてさらに採り続けていたら、なんと私が採ったことのないラミーカミキリがいたのである。給料をもらって虫採りをし、そしてこのカミキリが手に入る。夢ではないかと思った。

×　　×　　×　　×

ホタルの発生期が近づいてきた。ホタルの幼虫は陸へあがり土の中で蛹になる。まずこれを確かめて写真に残しておこうと思った。幼虫は雨の日に陸にあがるので、雨を待った。しかし、晴天続きで、その気配がない。やきもきした。ついに雨日となった。しかし、台風接近による雨だ。だから雨というより豪雨だ。出かけるかどうか迷った。しかし、このチャンスを逃すと見ることが出来ないかもしれないと、Ｋさんと出かけた。灯りをつけると幼虫は光らなくなるので、暗闇の中での作業だ。しかし、雨で思うように見ることが出来ない。しばらくしたら雨も風も止まった。今がチャンスだと必死にさがした。すると、遠くで青白い光が見えるではないか。神秘的であった。写真を撮ろうと近づいた。しかし、幼虫は危険を感じたのか光らなくなってしまった。同じことを何回か繰り返した。ホタルの写真撮影は難しいと思った。そして、ついて成功した。感激した。これがホタルの幼虫の光る姿か。デジタルカメラで再度その画像を再現して、また感激した。

×　　×　　×　　×

来年もホタルを発生させるには卵を産ませなければならない。しかし、この水路にはホタルの産卵に適した苔が生えていない。そこで、人口の産卵床を作って川岸に取り付けることにした。この作業も地域住民等の協力を得て行った。川にはホタルの餌であるカワニナがたくさんいた。準備完了。あとは舞い舞うホタルの光景を写真に写すだけだ。数日後、「すごい数のホタルでした」とＫさんが写真を見せてくれた。そこにはホタルの光が何本もの線となり、暗闇にただよっていた。「これがホタルの乱舞か」と見られなかった悔しさはあったものの、来年の楽しみにしておこうと自分に言い聞かせた。

山のおじゃまむし（７６）
ストレス、ナガサキアゲハ

前号でお話したように以前、私は帯状疱疹にかかり、医者通いをしていたことがあった。病気にかかった当初はすぐに治るだろうと思っていたが、１ヶ月たつのに痛みはいっこうにおさまらない。どうもこの病気を甘く見ていたようだ。顔をゆがめたくなるような激痛は少なくなったが、常にしびれをともなう痛さが続いている。こうゆう状態が続くと、気力がなえてくるから困ったものだ。実は、この原稿を書くのもおっくうで嫌々書いているという状態だ。いやな疫病神に取り付かれたものだと思う。私は先生に聞いた。「この病気はどれくらいで治りますか」。「最低６ヶ月。でも、あなたは年だから１年くらいかかるかもしれない」。「１年もかかる」。いやー、これは参った。

×　　×　　×　　×

私はこの病気について再度先生に尋ねた。以下、そのやりとり。「なぜ、この病気にかかったのですか」。「この病気はほとんどストレスと疲れからきています。最近、あなたの身辺にかわったことはありませんでしたか」。「私は新しい職場に勤めています」。「それが大きな原因だと思います。なれない仕事でいろいろ心労がかさなったうえ、長年の疲れがたまっていたのでしょう」。「ストレスは違うと思います。今の職場は環境もよく、楽しく仕事をしているからです」。「それはあなたが思っているだけで、やはりストレスがあったのですよ」。「ストレスがあったのだろうか」。私は考え込んでしまった。しばらくして、「今の職場で帯状疱疹にかかったのだから、違うところだったらそれこそ慣れない仕事でストレスがたまりもっとひどい病気にかかっていたかもしれない」。

×　　×　　×　　×

とは言うものの、私はストレスではなく疲れが原因だと確信している。それは、炎天下で連日現場での昆虫調査が続いたからである。今考えればこの暑さにやられ、疲れがたまっていたのだろうと思う。でも、その頃は駄物と呼ばれる昆虫しか採れなかったので、よけい疲れがたまったのだろうと思っていた。ところが、いくら疲れていても、この疲れが吹き飛んでしまうことがある。希少種や珍しい昆虫が採れたときである。「採った！」と胸が熱くなり、疲れがとれるだけでなく逆に元気がでてくるのである。そういえばこの調査でもこうした種がわずかではあるが採れている。しかも、ひどく体がだるいと感じる頃に採れているのだ。そのお陰でまた元気がでてくるという繰り返しだったのである。だから実際は疲れていたけど、疲れていないと錯覚していたのである。

×　　×　　×　　×

その日は３０度を越す暑い日であった。この暑さに皆が参っていた。そんな時、ノアザミの花に黒い大きな蝶が飛んできた。私は捕虫網を振った。黒い蝶はナガサキアゲハであった。ナガサキアゲハは暖かい地方に分布している蝶で、岐阜県には生息していない。「ナガサキアゲハがいた。ビックニュースだ」。私はこんな珍しい蝶が採れたということで急に元気が出てきて、再びアザミを見て回った。

最後に先生は念をつくように言われた。「この病気を早く治すには汗をかかないこと。特に炎天下での仕事はひかえること。そして栄養あるものを食べて静養すること」。でも、今の仕事を考えると・・。